

【ラウンドテーブル】

「アルポー著『オルケゾグラフィ』をめぐって」

コーディネーター：今谷 和徳（東日本支部）

登壇者：関根 敏子（東日本支部）

森 立子（日本女子体育大学）

石川 弓子（東日本支部）

【概要】今谷和徳（東日本支部）

ヨーロッパの音楽の歴史の中で舞曲が占める割合は非常に大きい。舞曲は本来、舞踏会などで踊られる舞踏の伴奏音楽である。音楽の歴史の中では舞踏そのものについての言及はそれほど多くないが、中でも、フランスにおける舞踏に関して全体的に紹介し、その踊り方を具体的に詳細に記し、16世紀の後半にフランスで出版されたトワノ・アルポー著『オルケゾグラフィ』は重要である。

この書では、当時のフランスで踊られていたさまざまな舞踏の踊り方を具体的に紹介するとともに、その背景にある社会状況についても触れられている。1982年に発足した古典舞踏研究会では、初めからこの有意義な著作を読み、翻訳することを行ってきた。その間さまざまな問題に直面した結果、翻訳に37年もの歳月を費やすこととなったが、著者アルポー（本名ジャン・タブロ）の生誕500年の誕生日、2020年3月17日に、ようやくその翻訳書が出版されるに至った。その間、のべ67人がその翻訳作業に参加したのだが、最終的にその翻訳出版のメンバーとして名前を連ねることになったのは11名である。

このラウンドテーブルでは、その『オルケゾグラフィ』の翻訳に携わったメンバーのうちの4名が、それぞれの立場からこの書のさまざまな側面についてコメントする。それによって、この書の重要性が広く認識されることになれば幸いである。

今谷和徳：『オルケゾグラフィ』とその翻訳

まず、アルポー著『オルケゾグラフィ』についてその具体的な構成を紹介し、著作の翻訳過程について述べたあと、最終的にまとめられた翻訳書の構成について説明する。その翻訳書では、単に本文の翻訳のみを掲載したわけではなく、詳細な訳注を付し、さらに『オルケゾグラフィ』の理解のための手引きとして、訳者のうちの数名が、著作に関わるさまざまな側面についての論文を執筆して添えたのである。そうした点についても触れる。

関根敏子：『オルケゾグラフィ』における拍子、テンポ、旋法

『オルケゾグラフィ』の翻訳にあたっては、拍子、テンポ、旋法などに関する解釈について長らく議論が重ねられ、訳語も何度か変更された。しかし『オルケゾグラフィ』に詳細な定義や体系化は見出されない。そのため、個々の用語を詳細に検討することによって、本書の歴史的 position を明らかにし、続く世紀におけるフランス独自の音楽理論と興味深い関係があることにも触れる。

森 立子：舞踊史における『オルケゾグラフィ』

『オルケゾグラフィ』とその著者アルポーの名は、後世に出版された舞踊関連の文献の中にもしばしば現れる。これらの文献において、アルポーの『オルケゾグラフィ』がどのような形で言及されているのか、またとりわけ舞踊史に関する記述の中で『オルケゾグラフィ』がどのように捉えられているのかについて検討を試みる。これにより、『オルケゾグラフィ』が舞踊史上いかに位置づけられてきたのかを考察したい。

石川弓子：『オルケゾグラフィ』をめぐる舞踏書

16 世紀中頃～17 世紀初頭において『オルケゾグラフィ』はいかなる位置を占めていたのか。この時期の他の舞踏書で論じられた舞踏について、*Ad suos compagnones...* (1531)、*Instruction pour dancer...*(c1610)、*Louange de la danse* (c1619)、*Apologie de la danse* (1623)を取り上げ、『オルケゾグラフィ』と比較考察する。